

小林 功郎*

Kohro KOBAYASHI*

日本列島を南から桜前線が北上して行き、さわやかな新緑の季節を迎えつつある。筆者の勤務する宮崎台の中央研究所には、走路に面して立派な桜並木があり、春には満開の桜が、研究所内の人々はもとより、走路を御近所の人々の目を楽しませている。この桜を見るたびに、この30数年間の半導体レーザーのめざましい発展の歴史を思い出す。この桜の木は、半導体レーザーの長寿命化の成果に対して、林 巖雄、南日 康夫の両氏が受賞された市村賞を記念して植えられたものである。両氏が賞に付いてきた賞金の一部を使って桜の苗木を購入され、当時両氏の指導の元で半導体レーザーの研究開発をおこなっていた10人ほどの研究者、技術者(筆者もその一人)が、たしか休日に出て、1本1本植えた記憶がある。植えたときの写真が今も残っている。もちろん、20数年前のことであるから、写真の中では、林、南日の両氏を始め、そこに参加していた人は全員若い、桜の苗木も直径数センチメートル、高さ2、3メートルと、ひどく若い。木の幹が直径4、50センチメートルにもなり、道路にはみ出さんばかりに大きく枝を張った現在の姿は、当時想像もつかなかった。この苗木から現在の巨木に育ちつつある記念の桜並木は、大きく発展した半導体レーザーの姿をよく表しているように思われる。

筆者はGaAs半導体レーザーがまだ室温で連続発振する前から、半導体レーザーの研究開発に携わる機会を得、以来、今日まで、その関わり方や内容に濃淡はあるものの、一貫して企業の中で半導体レーザーの研究開発に関わってきた。直接自分であれこれ工夫し夢中になって実験した時代、数人の若手研究者とともに目標に向かっていった時代、など、最初の10年間くらいが特に印象に残っている。これらの時代には、半年毎にやってくる、応用物理学会や電子通信学会の講演会/全国大会が、他の企業や大学との競争の場であった。ある時は自信を持って、また別の時はおそろおそろ、学会の場に臨んだ。よそよりも優れた性能、よそよりも筋の良い構造の半導体レーザーを目指して、しのぎを削っていた各社の仲間が、学会の場だけでなく、学会後の今で言ういわゆるオフラインの少しアルコールが入った場でも、企業、大学の枠を越えた交流が出来たような気がする。CD(コンパクトディスク)用のAlGaAs半導体レーザーから光ファイバ通信用InGaAsP長波長帯半導体レーザーまで、日本勢が研究開発および実用化で世界をリードしてこれた一因が、この学会の場を通じた切磋琢磨にあったように思う。

霜田 光一レーザー学会会長が、本誌の25巻第2号の本欄に書かれている。部分的に引用させてもらう。“研究者・技術者の創造性を培い、錬磨し、そして独創性を十分に発揮するのに、研究会、年次大会、シンポジウムなどでの質疑応答を活発にせよ。質疑応答によって研究に対する刺激と激励を享受する。また、発表者、質問者、参加者も興奮を覚える”。当時の日本の半導体レーザーの研究開発グループは、幾分なりともこのような状況にあったのではないと思われる。このような意味で、学会の持つ重要性をあらためて認識したい。半導体レーザーの領域に限らないが、次の桜の苗木を植え、大きな木に育てる努力をこれからも続けていきたい。

* 日本電気(株)光エレクトロニクス研究所 (〒305 茨城県つくば市御幸が丘34)

* Opto-Electronics Research Laboratories, NEC Corporation, 34 Miyukigaoka, Tsukuba Ibaragi 305